

## ～地域を一つの大きな家族に～

藤沢市大庭

小規模多機能型居宅介護ぐるんとび一駒寄

代表取締役 理学療法士 菅原健介

### 1 はじめに

私は東日本大震災での長期支援活動を契機に、これからの日本の未来には、地域の人と人とのつながり・助け合いが大切であり、その拠点となる場所の必要性も肌で感じました。『小規模多機能型居宅介護』と『集合住宅』を掛け合わせることで、日本の未来に向けて可能性が拓けるのではないかとこの思いで起業しました。福祉制度を地域拠点として活用する3年間の取り組みで実践できたこと、可能性などをご報告できれば幸いです。

### 2 事例や取り組みの紹介

日本で初めて独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）『パークサイド駒寄』団地のひと部屋に小規模多機能型居宅介護を開設。団地は家族という単位の生活に安心感を与え、そして面白くする可能性のある『器』。一つの【まち】のように連帯した共同生活の場が介護だけではなく、自治会活動、子育て、障害、待機児童、不登校などの受け皿になっている。

#### ① 介護する側、される側という枠組みを超えて『一住民として』居住する集合住宅

約260世帯の団地の中に、ぐるんとび一が運営する小規模多機能型居宅介護、コミュニティスペース、社員寮があり、看護師・理学療法士・作業療法士・介護福祉士などのスタッフ約10名が住民として転居。高齢者と地域の大学生、要介護5の高齢者と26歳の理学療法士がルームシェアをしていたり、小規模多機能を利用する利用者10名も住民として居住。スタッフの半数以上が自治会役員にもなっている。また、不登校の子や、待機児童、障害児などが気軽に遊びに出入りしたり、自治会の定例会が行われるなど、多世代交流の地域拠点となってきた。



## ② 共に暮らすことでの安心感・信頼感

地域で最期まで暮らし続けられる。言葉だけではなく、体感できる『安心』と『信頼』をどう創り出せるか。重度の認知症やアルコール依存症、統合失調症があっても、共に暮らし、信頼関係のあるスタッフと、24時間365日、困ったら同じ団地に住むスタッフがすぐに訪問。小規模多機能型居宅介護×集合住宅の特性を生かし、地域そして団地で最期まで暮らすことにチャレンジしている。



## ③ 『あたりまえ』の生きがいを支えるケア

小規模多機能では一人一人、多様な生き方に合わせた完全個別のケアを提供。『プールに行きたい』『また畑仕事をやりたい』『料理を作りたい』など、生きがいを支援している。

## ④ 福祉事業が町おこしのツールに

ぐるんとびーがある湘南大庭地区3.2万人の町は、藤沢市で高齢化率が一番高い地域であり、40年前に作られた産業のないニュータウン。自治会活動の高齢化など課題になる中、ぐるんとびーが出来たことで、ほかの地域で働いていた介護医療職が地元で働き始め、地域づくりに意欲的な若者が流入。自治会、防災活動、敬老会などの活動に参加し地域活性の一翼を担っている。

## ⑤ 自治会と共創という新しいカタチ

パークサイド駒寄の自治会パンフレットには『自治会とぐるんとびーの関係』が明記されている。住民と企業という枠を越え、ともに同じ団地に住む『いち住民』として、毎月の飲み会、健康相談会、お祭りなどを共催している。

## 3 考察

認知症や精神疾患の高齢者のケアに小規模多機能×集合住宅は一定の効果을上げている。また、この3年間で、団地の中で17部屋、20人以上の住人（利用者、スタッフ、シングルマザー）が転居、自治会の役員の平均年齢76歳→58歳と若返り、役員数6→9人へ増加。夏祭りなどの地域行事が復活。介護事業所としてだけではなく、地域交流拠点として利用することで、自治会をはじめ、団地のさまざまなニーズが集まってくる拠点としての役割も果たせるようになってきている。これからの時代、将来的に運営費用や、解体費用がかかる新設や大型の施設を増やすのではなく、既存の建物を利用しながらソフトの力で、次の時代に備えることが必要だと感じている。右図の様に、集合住宅を『器』として、介護・医療・御用聞き・子ども・カフェなど地域に必要な機能を、そこに暮らす住民ニーズに合わせ、住民共創で生み出していく。そして、場所も人も財源もみんなでシェアしていく仕組みが有効であると感じるとともに、地域共生に向け、本来の福祉の在り方を考える相互の学び舎にもなりえる可能性を感じる。

## 4 終わりに

いち住民として、地域と共にチャレンジを繰り返しながら進んでいきたいと思えます。

